

今年度第3回目となる外国語活動・外国語科の研究授業を 清水 拓也 教諭が行いました。協議会では、絵本を活用した低学年の外国語活動の指導方法について協議を行いました。指導・講評では、京都光華女子大学教授 田縁 真弓先生よりご指導いただき、研究を深めました。

研究主題

関わり合い、学びを広げ、深める児童の育成

～ 思いを豊かに表現できる授業づくりを通して～

授業者:2年2組 担任 清水 拓也 教諭

単元名:「Takoyaki Boy」

指導講評:京都光華女子大学教授 田縁 真弓先生より



〈研究経過報告〉

研究の視点について

視点1 振り返りカードの工夫

視点2 絵本を使った目的・場面・状況等を明確にした言語活動の工夫

視点3 表現を繰り返し使うための工夫

〈授業者自評〉

意欲が高く「やりたい!」と思う子が多い。

今回は、あえてたこ焼きボーイはやらせずにトッピングのみにした。たこ焼きボーイと言いたい子が多く、授業の最後には児童自ら「オリジナル たこやきボーイをやろう」という流れになった。教材が素晴らしいので毎年、2年生の外国語活動でやっていきたい。

絵本を読む前(授業の前までの工夫)として、実物(たこ焼きのマスコット、青のり、鰹節、マヨネーズの袋)を貼っておいた。低学年分科会の先生に役をやらしてもらったことで、児童が予想でき発話にもつながった。

〈研究協議会〉

視点1 「Takoyaki boy」の読み聞かせにおいて、教師と一緒に発話しようとしてるか。

・「足立区」を題材にして行う活動はよかった。同じ認識をもって伝えあっているから、友達のフォローも入りやすく、コミュニケーションがスムーズに進んでいた。話を広げようとする子どもたちの意識が素晴らしかった。

〈中間指導について〉

・中間指導をする際、児童から出てくる「～が言いたいけど、言えなかった。」という発言に対して、解決策を提示できるか不安。特に、アドバイザーの先生がいらっしゃらない場合に、何かよい方法はあるか。

→振り返りシートを児童との交換日記のように活用している。言えなかったことや、言いたい表現を「具体的に」書か

せているため、児童それぞれが伝えたいことを把握できる。把握したものは、どのような英語表現を使うべきか調べ、メモをして授業に臨んでいる。(奥田)

書くことの指導について

・書くことが中心の授業としては、所要時間が短かったのではないかと

→中学校は文法指導中心、文法を手がかりに話し方を学習する。小学校は、聞き慣れていること、話し慣れていることを書き写すため、如何に言語活動の中で習得させられるのかが重要であると考えている。言語活動をメインとして、書くことの指導は、文字指導(きちんと四線の中に記入できる。ピリオドを打てる。など)を適切に行えば良いと考えており、活動時間は関係ないと考え指導しているがご指導いただきたい。(奥田)

→今回の授業では、書いた文は、「Where is the best place in Adachi?」であった。文をなぞることは1回、4線に写すことは1回の計2回書かせたが、書くことに慣れさせるためにも、早く書き終えた児童に対しては、4線に2・3回書かせてもよかった。(工藤先生)

・ワークシートで文章を書く際に、注意点を丁寧に確認することで、英語学習の障壁をなるべく少なくする工夫ができてよかった。

〈指導・講評：京都光華女子大学教授 田縁 真弓 先生〉

書く指導の基本事項

・「書く指導」を行う上で、コミュニケーションを通して「話している」ことを「書くこと」が基本。

・「コミュニケーションで使っている。」「先生がよく話している。」「教室や学校内に掲示されている。」といった身近に広がっている言葉を文字として認識させることが大切。

・聴覚情報と視覚・文字情報とをリンクさせることが大切。聴覚情報だけでは、今回書いた、「Where is the best place in Adachi?」の中の「the best place」を1単語だと勘違いする児童も出てくる。そういった間違いを減らし、中学校以降の学習にもつなげていくことが重要。

中間指導の在り方

・中間指導を大切にしているが、何を重点にしているかが大切。あらかじめ教育的な意図を考えて中間指導をしなければ、身に付けるべき英語から逸脱することもある。複数回中間指導を行う場合は、「1回目は、この指導内容を、2回目は、、、」と、指導ポイントについてあらかじめ計画を立てた上で進めていけるとよい。今回の授業では、ポップコーンのフレーバーについて時間をかけて指導をしていたが、ポール先生に足立区のよいところを伝えることが目標の活動であったので、その点は指導の優先順位としては高くはない。ポール先生に何を伝えることがよやかに着目させ、「内容」を考えさせる指導をより重点的に行うとよかった。

文法的な正しさの重要性

・中間指導の際に、「B has A.」を用いて、「Bには、Aがある。」と表現させていたが、「You can see A in B.」の方が文法的に適切であった。小学校段階での指導の難しさでもあるが、多少でも文法的に間違いがあると、中学校で学習する際に、児童の覚え直す負担が増加する。中間指導の際は注意すべき。

モデルの提示とタイミング

・本授業において、教師のおすすめを紹介するビデオを授業冒頭に流したのはよかった。児童も意欲が高まったと同時に、表現の確認にも役立っていた。また、自分は何を紹介しようか思考を深める時間にもなったのではないかと。

・モデルを提示するタイミングは、毎回授業冒頭でなくてもよい。授業ごとに提示すべきタイミングを図って行うべき。例えば、中間指導の際に、児童が表現する内容に困っているのであれば、その際に提示すれば効果はより高い。

学習環境

・「書く指導」を行う上で重要な要素の一つとして、学習環境や用具の整備がある。今回の授業内で、短い鉛筆を使っている児童が何人かいた。特に4線に記入する際は、適切な長さの鉛筆と、適切な姿勢を意識させるべき。

「小学校段階においては、言語活動がメインになる。現在研究を進めている、「言語活動の充実」、そしてそのための「中間指導」をより一層高めるとともに、「書くこと」の基本的なことを実行してほしい。」